

青少年の自殺と宗教教育

——なぜ生きねばならぬのか——

百万遍知恩寺法主

林

靈

法

青少年の自殺と家庭

私はこの春以来、私の身边において、三人の自殺

者に接した。一人は七十八才の老人であり、二人はいずれも高校卒業と大学の一年生であった。私はここ十八年間、名古屋において毎月一回日曜宗教講座をずっとつづけている。毎回百名余の出席で、中には私の最初からの講座をテープにして持っていられる方もある。聴講していられる方々で大体一〇か一五パーセント位が、毎回新しい方で、他は殆ど長らく聴講をつづけられている方である。午前十時から

十二時までで、午後一時から三時まで、有志の質問と座談会になって皆さんの質問や告白を受けているのである。

この春以来、三人の方からこうした不幸を訴えられていた。老いたる母親の自殺については、その三男二女の他家に嫁いだ末娘から詳しく事情を訴えられた。母親は始め私の宗教講座を娘たちに支えられながら聴講に來られたし、私もいろいろ注意を伝えていたが、家の者からは余りに大切に扱われていた。孤独の中に追いこまれ、そこへ老人うつ病が加わって、家族の中の連帯を自ら絶って、自虐的に孤絶と

自分の生きることの無用視を深めて行つて遂に自ら命を絶った。少年の場合、一人の方は高校を出たが、末の息子で兄二人は普通に出て大学も出て立派に活動しているのだが、この末子は母親に甘やかされて勉強が出来ず、高校を出たが、ぶらぶらしていた。世間態も悪いからと言って親は大学をあきらめて漸く市の体育館の事務に採用されることになった。ところが、父親はいつも兄二人と比較して、愚痴を本人にぶちつけて行つた。母親は息子をいつもかばっていたが、性格が弱く内向的で、親への反抗も表立ってつきつけることもしないほど消極的なものであった。ところが、ある夕方、めずらしく西洋菓子を買山に買って来て、夜に十分にひとりで食べていたが、朝になったら電気で感電死を遂げていた。母親は本人の幼児からのいろいろの買山な写真を持参して、いまになって始めてあの子の心中が解るようになった、私は大きな過ちをしました。あの子はおそい末子でした。だから、おろせと主人に言われ、私

も一時そう思っていました。その時分の私は母親として申しわけない、まちがっていました。主人はいつも兄と比較してぶつぶつ言つて来ました。なぜその時分に解つてやれなかったものかと、ひろげた写真の上に涙を落しながら、このままでは私は死にきれません。どう懺悔したら私は救われるのかと、長いこと泣きながら訴えられた。それからもう一人の場合は、今日の日本社会のどこにでも見受けられる事実である。高校のひとり息子に対して病院を経営する父親は、国立の医学部を出て親のあとを継ぐことをきびしく息子に求めた。ところが、息子は父親の病院経営に対して子供として疑問を持つて来た。今日の病院の経営、特に医師としての父親の生きざまに対して、少年ながら正直な目で疑問を持ちつけて来た。父親の期待を裏切つて文学をやるために私大の文学部に入ってしまった。父親の怒りは大きく、間に入つた母親の苦勞は大きく、やがて息子は親元をとり出して、あちこちに身を寄せていたが、

遂に自殺へと走った。この場合も母親が、自分たちが悪かったんだと、父親を責め、また自分を責めていたのである。

こうした問題と関連して、私が日曜宗教講座を十八年前に始めた理由から述べて行こう。当時東海高等学校の校長であった私は、毎月一回必ずP・T・Aをひらいて、高校生である子供の勉学と生活の指導について親たちに講話をつづけていた。毎月必ずP・T・Aをひらいて家庭における親の指導について語った。いつも三百四百、或はテーマについては七百八百と沢山な方が来聴せられた。ところが、段々とつづけている間にこういう事実がわかって来た。それは高校生の中で生活面において問題をひきおこした子供の家庭には、必ずと言ってよいほどその原因があるということであった。勿論、現代社会に非行や自殺への沢山の誘惑があり、学校の教師や教育のうちにその原因のあることは言うまでもないが、青少年の成長期にとって一番大切な環境である家庭

に必ず問題があるということである。親として子供のとりあつかいも大切だが、先ず親たちが自分の人生に正しい姿勢を持つこと、親自身の生活の姿勢を正すということが極めて大事であるということがわかって来たのである。親自身が自らの生きる人生に誠実な姿を見せることなしに、いくら息子や娘に向かって、口やかましく勉強せよ、一流大学に入れと言ったところで、一番にむづかしい反抗期のわが子を指導することがいかに困難であるかと言うことである。

そこで、私は親自身が人生に誠実に生きるために親自身の教育を始めたのである。そして、人生に対して、誠実に生きる姿勢は、私のそれまでの人生経験によれば、宗教的な道念なり信仰なしには絶対に全うせられないということであった。こうしたところから、宗教的な思想なり信仰から新しい人生へのめざめを求めて、毎月一回日曜宗教講座というものを、学校外の名古屋市の中心部にあるテレビ塔の下の方

知美術館内のホールでひらくようになった。昭和三十四年四月であった。それ以来、会場は都合で変って来ているが、この長い間、私はこの宗教講座を通して聴講の方々と共に人生を歩いて来ているが、沢山の聴講の親を通して、親自身の問題は勿論であるが、息子や娘たち青少年たちの今日に生きる問題について、ともに苦しみ、ともに考えて来ているのである。

自殺の直接原因とその準備段階

私はいまここで最近非常にふえて来たわが国の青少年の自殺の問題をとりあげて、今日における、少年の福祉とは何かということを、教育的宗教的立場から根本的に問い正して行きたいと思う。

最近の少年の非行や自殺の主役は、ますます中、高校生に結集して来ている。朝日新聞は本年七月廿七日欄に警視庁が今年上半年期の「少年の非行と自殺の実態」をまとめたものを発表した、少年の非行

と自殺は、戦後第三のピークを迎えたとして、昨年同期に比べて著しく増えていることを示し、それは特に中高生の分が増加したためとしている。そして、その増加の原因としては、受験戦争などによる「落ちこぼれ」の行動に対する補導が警察にまかせがちと言った警察至上主義の誤りを訴えて、学校や家庭の教育環境が大きく影響を与えていることを指摘している。

この中で少年の自殺についてであるが、すでに本年の上半期で五百二十一人（男子三百七十三人、女子百四十八人）で、昨年同期より六十八人（一五％）増えている。これら自殺少年中で小学生が九人、中学生七十四人、高校生が百八十七人で、昨年同期に比べて、それぞれ五人、三十五人、四十一人と大幅な増加である。このうち中学生の増加が目立ち、少年の自殺の二人について一人は中、高校生ということになっている。更に同庁の調べでは五才―十四才の自殺率（人口十万人当たりの自殺者）は、○・

六、十五才—二十四才の自殺率は一六・五となっている。五才—十四才までの自殺率は西ドイツの〇・七に次ぎ米、英、フランス、カナダ、イタリアよりも高い。また十五才—二十四才はこれら各国よりも高くなっており、日本の少年の自殺率は、国際的にも高いことに注目すべき事実である。

さて、このような少年の自殺の数を挙げてみたのだが、これを見て人は言うかも知れない。日本全体から見れば、その数は実に少い。しかし、それは氷山のごく一角だけを眺めてのこと、かくされた大きな地盤を見ぬくことである。少年、或は青少年の自殺については、年々その年齢が低年化して来てその数は急速に増えて来ているのだが、毎年発表される厚生省の白書と警察庁の発表には多少の違いはあるにしても、その発表された自殺者自身についても、その数はこれにつくるものではない。行くえ不明の者が多くある。また未遂の者が既遂の者の十二から十四倍である。自殺者の背景にこうした実に数

多い青少年の苦悩しつづける者のあることが忘れられてはならない。そして、最後に一番に心して見つめなくてはならぬことは、いつでも直接的な原因である刺戟を加えれば、容易に自殺行為にまで追いつめられていく環境とか情況というものが、いまの日本の家庭や学校や社会には大きく準備されているということである。青少年の自殺などというのは、きわめて複雑な条件なり関係が重なり合っておるものである。単純なものではない。特に最近の青少年の自殺について、その原因について、親や教師たちは直ちには中々と知ることが出来なくなつて来ている。「何ぜそんな馬鹿なことをしてくれた」「何ぜ自分に相談をしなかったのか」と、事後の悲しい結果にあたって、親や教師が驚いて訴える。そうではないのだ。そこまで行くには、すでに自殺者はいく度も「なぜ生きねばならぬのか」ということを家庭や学校環境において行動や姿勢で示していたのである。人間の生きる心の連帯から脱落した孤独な不安

な魂は、すでに何らかの危険信号を出していたのである。ところが、それを危険として受けとることの出来る正常な精神衛生が、今日の家庭環境のうちにまた今日の学校環境の中には失われてしまっているのである。親や教師が自分の人生に対する正常な精神状況にありさえすれば、孤絶の中につき落されている一匹の小羊の異常性にすでに十分に気づいているはずである。それが出来ぬということは、親や教師自身の精神状況が大なり小なり異常であるからにほかならない。

ところで、このような自殺について直接の原因と、自殺への準備段階としての要因について、精神医学の専門家に聴いておこう。この場合直接の原因なり動機というものは、それだけで自殺というものが生まれるものではなくて、すでに直接の動機を加えることによって生まれるべき素地が出来ていることを予想するものであって、その素地が自殺の準備段階とか要因と言われるべきものである。だから表面的に

単純なように見えていても、これらの地盤なり背景となつたさまざまな原因や要因が複雑にからまり合つて、自殺という事実が生まれて来ている。

そこで、直接の動機^①について言えば、先ず一般的にはこう言いうる。小学生や中学生の場合には、家庭や学校における緊張感、特に親や教師の叱責、学校での友人間におけるトラブルが直接の動機となっている。高校から大学にかけての青少年の場合には、その動機が小中学生の場合には環境的なものの比重が重いのにくらべて、個人的な問題へと比重が變つてくる。即ち受験失敗、異性との愛情失敗、就職問題からくる前途不安等である。そして、この青春期における自我の確立へのめざめから来る孤独と不安と言つた人生的な苦悩というものが深刻になっている。ついでに壮年期や老年期について述べると、先ず壮年期における自殺の直接動機は、男性の場合は事業における失敗、悩みが多く、女性の場合は家庭的な夫婦親子間のトラブルである。老年期において

は身体的疾患がその重なる動機となっている。

但し、この直接の動機の種類について、試験の失敗から来る自殺が中学小学生へと段々低学年化の現象を示し、異性との愛情亀裂より自殺へと行く者も、高校生同士とか、高中生同士と言った事情になって来ている。これらの事情はいわゆる青年期が上と下へと大きくはばをひろげて来たことによる。一般に青年期とは大人とも異り、それかと言ってすでに子供とも異なる。身体的には早熟であって大人と同じになっても、精神的には自分のからだを統制出来るだけの理性的な成熟を得ない存在である。最近には青少年たちの身体的な成長は、物質的生活に恵まれて早く青少年の姿を脱して成人の域に達するし、心理的にもさまざまなマス・コミの刺激を通して、年齢的には非常に早く成長を重ねて来ている。しかし、過剰な情報化社会と過保護の環境にあって、自分の人生にいか生きていくかの適確なる選択と決断とを持ち合わせてはいない。そうした理由から、自殺

という現象もこうした青少年期の矛盾を反映して、低学年の者に段々とあらわれて来ているのである。ところで、問題は、自殺の直接動機の背景をなす準備段階としての要因である。そして、青少年の一番に大きな要因が家族関係にあるということである。もっとも、この自殺の準備段階としての要因については、専門の精神科医によると大体三種類があげられている^⑤。即ち社会的要因、生物学的要因、心理学的要因である。

社会的要因とは人間は個人で生きるのではなくて、自然や社会環境の複雑な環境の中に生きて行くもので、その複雑な関係の中にあって、いろいろの悪い不幸な条件の中でおのずから自殺への要因をつくっていくのである。いまは単に青少年だけに限られず一般的に自殺に関して言えば、その要因として季節、時刻、性別、職業、戦争、経済変動、宗教などがあげられる。次に生物学的要因としては、体質、各種の疾患、遺伝などがあげられる。そして、第三に心

理学的要因であるが、これは自殺がたとえどのような要因によって発現するとしても、結局は異常な心理であることを思うと、自殺者の心理状態を知ることとはきわめて重要なことである。そして、青少年をして自殺傾向という異常な心理に追いこんで行く最大の準備要因は、家族関係のさまざまな障害にある。即ち両親間の夫婦不和、親の情緒的障害、親の死と欠損、親からの遺棄等である。その例として精神科医の説明によれば、欠損家庭の自殺に及ぼす影響の強いことを指摘して、両親、同胞、配偶者などの近縁者が死亡している者が自殺者の九五%。六〇%が片親、または両親を青春期及び幼少児期に失っている。そして、六八%が十四才以前に両親を失っている。

ところで、ここで私が一番大切な自殺の要因として問題にしなければならぬことは、青少年の自殺の要因としての両親の間の夫婦の不和とか親の情緒的障害とか、更に親のきびしすぎるとか甘やかしすぎ

るとか言った、これらすべてを一括した家庭における両親の異常な心理状態というものである。更に言えば、親自身の自分の人生に対する生きる姿勢の問題、ということになると思うのである。

私は先きに自分の三十数年にわたる教育経験を通して、教育上不幸なる行動の少年のあった場合、今日の学校の教育制度にも勿論、その要因の一つがあるのだが、必ず家庭に一番に大きな原因があったということを述べた。だから、そんな場合に、私は息子や娘を問い正すと共に、先ず両親を呼び求めて問いただして行ったが、必ず両親の情緒的な障害をそこに発見していた。そして、家庭の心理状況のひどい場合には、息子を私の寺に引きとって学校に通わした。大学の受験期の少年は神経的にもノイローゼ寸前の者が極めて多い。私はノイローゼになった少年にもずい分苦しめられた。だから、私の寺には毎年東海高校の生徒を二人か三人自分の息子のようにして手許においていた。

ここで、私は家庭における両親の情緒的異状と言った。このことを今日の教育上きわめて大切な学問となつてゐる精神衛生の上から言いかえると、家庭における精神的な健康である眞の愛情、安定感、そして是認というものが家庭環境に欠けているということである。人間は青少年であつても老人であつても、これが満足されないと精神の異常を來たしたり、自殺したりする基本的な欲求がいくつもある。この方面の学者の見解によつてその数が八つから十ほどあるが、その中で一番大切なものとして私はいま愛情、安定感、是認への基本的な欲求の三つをあげたのである。ところが、こうした基本的な欲求が満たされている家庭ならばよいが、これが満たされていないところから、補償や逃避作用としてさまざまな非行や自殺へと追いこまれて行くのであつて、現在の日本の殆どの家庭はこの考について大なり小なり問題をかかえていると言える。

子供は親がつくるという考え

いまここに身近な事実をあげて、日本の家庭の母親の精神状態を分析して見たい。先般、私は婦人会の講演の依頼をうけて参上したが、控席でしばらく待っていた。部屋の間で、幹事の若い母親が数人頭をそろえて話し合つてゐるのである。聞くともなく私の耳に入つて來たのは、このような意味の言葉であつた。「とうとう出来てしまつたのよ」「あんな、馬鹿ね、あれほど私が言つたのに」「注意してただけど、どうしよう」私は非常に不愉快な気持ちになつた。このような日本の若い母親に向かつて、自分は家庭における子供の教育について語らねばならないのである。ただ、どうしたら自分の子供が親の願うように学習を進めてよき点数をとり、そしてよき学校に入ってくれるかと、このことばかり願つてゐるのがいまの日本の母親である。自ら母親としてどう生きることが正しい人間としての姿勢

であるかを問うことなしに、ただわが子に向かつて
學歷社会における優者たることを求めているのであ
る。私は若い母親たちの対話を受けて、先ず親自身
の人生に対する生き方が根本的にまちがっているこ
とを思っていた。親自身の生きる姿勢を直すことか
ら始めなくてはならぬのである。道はまことに遠い
と、しみじみと感ぜさせられていた。

ここで日本の家庭における親の自らの生きる姿勢
の問題であるが、私は青少年の自殺の問題と関連し
て宗教或は宗教教育の重要な問題について論述すべ
きときとなった。

上述の婦人会幹事方の会話からもよくわかるよう
に、日本の家庭における親、特に母親が自分の子供
に対する姿勢は、子供は自分が生んだもの、従って
自分のものであるという強い考え方である。かつて
の当然とされた「子供は授かる」即ち賜りたるもの
であるという意識が、今日には全くうすれて失って
来ている。好きなときに好きな数だけの子供を「つ

くる」という考えである。妊娠調節、出生数の減少、
人工妊娠中絶数の大きさからわかるように、いまや
子供は「授かる」ものではなく、夫婦が「つくり」或
は「やめる」ものである。だから子供が大きくなる
まで、その養育が神仏から委ねられ任されている神
聖な義務であるとは言えなくなった。世界で幼稚園
の創始者であるフレーベルは、幼児の命を一粒の米
にたとえて、そこに他とかけがえない無限の可能
性を宿した尊い神の命を強調した。ところが、いま
や幼児と言えども犯すべからざる存在ではなくなっ
た。生まれてくるのも、そもその始めから親の意
志によってつくられたものであり、完全に親の私有
物となったのである。

子供の数は減少傾向にあり、数少い子供に親の手
を十二分にかけて育てあげる傾向はますます強くな
っている。現在では子供は自然に育って行くのでは
なく、促成栽培の植物のように出来るだけ速く、よ
りよく親がつくりあげて行くのである。そうした異

常の意識の集約化されたものが、進学競争であり、教育戦争である。だから、このような家庭環境にありては、子供は自然の力によって成長し成熟する生物と言うよりは、詰めこみや促成によって生産改良されていく道具であり機械であって、母親はそれを操るマニピュレータたる操縦者なのである。

濃密なこうした日本の母子関係では、子供は完全に母親の私有物であり、愛玩用の代理満足の道具と化して行くのである。日本では心中についても母子心中が特に目立つのであるが、こうした悲劇の中にも子供は自分のものと言う母親の意識が強い。ところが母子心中という事実に対して、西欧人はどうしても納得が行かないのである。親子心中に対する公判の場合など、悲運な母親に対して、判定は情状酌量されて執行猶予となっている。しかし西欧社会ではきびしく犯罪として扱われている。だから精神医学においても、欧米の研究者は家族殺しをともなう拡大自殺をはっきりと犯罪学^⑤の分野でとらえている

のに対して、日本では自殺学^⑥の分野でとらえている。罪に対する日本人の寛容さである。

ともかく、このような親子一体感の中で過保護の状況が生まれている。親は子供のためにいかなる不満も不快も不安もおこらないような十分な保護と配慮とを与えて、実際には年齢に応じて必要な程度のフラストレーションや攻撃性や努力や苦しみという大事なものを、親の愛という名の真綿の中にくるんでしまうのである。しかし、このような虚構の平安という母子一体感がいつまでも保たれるものでもあるまい。母親にとりて子供の反抗も敵意も攻撃も存在しないかの如き幻想は、やがて破られるときが来るのである。言うまでもなく子供が中学から高校にかけての少年期から青年期へと成長しゆく反抗期において、ここに親の、特に母親と子供との双方にとりての危機が爆発するのであった。子供にとっては上述して来たさまざまな非行から自殺という現実が生まれて来たのであった。

わが生命の深奥性

それならば、このような日本の家庭に見る母子関係の誤りであるということから、親の正しい人生のうけとり方とはどういうことであるのか。私はいま子供に対する母親の正しい受けとり方から述べて、親自身の人生に対する正しい生きる姿勢を問うて行こう。

以前より日本の家庭では両親が子供がほしいとなると、神仏、特に観音菩薩に願いをかけて子供の誕生をうけて来た。特に歴史に名をのこした聖者偉人の場合にその例が多い。しかし、ここで注意すべきことは神仏に願いをかけたから子供が授ったとは言えまい場合もある。願いをかけて授かる場合もあるだろうし、ない場合もあるだろう。大事なことは、生まれて来た場合に、子供を受けとる親の姿勢である。神仏から、天地の大きな命からわが身に賜りたる一つの尊い命として受けとるのと、つくるもやめ

るも自分たちの考え次第という生物学的次元で受けとるのは、生まれた子供の保育成長の上に家庭教育的に見て大きな影響力の相違を生んで、子供の将来には大きな問題を与えるということである。

それならば、子供の誕生にあたって、これを授かるとか、賜りたるものとして受けとることの意味とはどういうことだろう。授かるとか賜るとかいう精神的姿勢を、単に古い伝習とのみ考えることは誤りである。今日の親の子供に対する心理において、心理学や精神衛生のうえから見て、非常に重要な意味のあることが明らかにされている。

私は一つの事例で説明しよう。一日、私のもとに東海高校で縁を結んだ青年が現在社会で活動しているのだが、自分の親友を一人つれて来て、この友人は自分にとりて大切な友だが、半年前に自殺をしようとしたが幸い助かった、最近また死にたいと言っている、そこで死なぬように指導してほしいと言ふことであった。そこで、私は青年からつれて来た親

友の生まれてから現在（留年して大学在学中）までの家庭的事情を詳しく書いていた。幼児期に両親を亡くして親戚にあずけられ、高校大学時代とアルバイトをつづけて来ている。内向的な性格から自殺へ追いこまれて行った。ここにも自殺者には幼少年期に親を失ったものが実に多いことを示していた。つれて来た青年の長い身の上の説明の間、その学生は私の前に腰をかけて頭をうなだれていた。話をきき終った私は、始めて前の学生に向かつて、君はいくつかとたずねた。すると、始めて顔をあげて廿四才ですと答えた。とたん、私は冗談言っちゃいけない、君は廿四才じゃない、そんな自分の受けとり方をしているから、いつでも死にたくなるんだ。君の本当の年を教えてあげる。そこで、私はそれからその青年の本当の年を諄々と説明して行ったのである。

先ず、この地球が冷却してからの話にしよう。今から四十六億年前、太陽系の中の一つとしてとび散ったこの地球が冷却して、始め地球上には無機物の

化学作用が行われた。今でも水素が一番に多いが、先ず水素の化学作用から化学の進化がつづいた。やがて、さまざまな元素へと化学進化が行われて行ったが、この間が約十億年である。そして、ある偶然のよき機会を得て、この地球上に生命の原形となるものの発生を見た。それはバクテリアかウイルスか、ともかく偶然に生命の発生を見た。今日ではその原因理由について科学は説明を与えていないから、偶然という仮説になっている。それからが生物進化の歴史に入るのである。その年月が実に約三十五億年である。さまざまな動物魚類の系統へと発展して行くのだが、その系統が何千という生物進化の系統となって現われていく。そして人間の系統の誕生は、この長い生物進化の歴史の中で近々二百万年前に遡ることが出来るというのである。

しかし、このように人間の生命の誕生を受けとって来ると、驚くべき現実と逢着する。いま一つの人間の生命をこの世に受くることは、並々ならぬまこ

とに気の遠くなるような、殆ど永遠と言った歴史的経過の上に生まれていることだ。地球が出来てから四十六億年である。更に遡って太陽系の創造ということになる。更に五十億年と言われている。この大宇宙には無数の太陽系があるといわれる、まことに気が遠くなる報告である。だから、この地球が出来てからと言うが、この四十六億年というのは実に永遠とつけとられてよい。無機有機の長い進化発展の果てに今日人間の誕生を得て、文明文化の人類生活を営むことを得ているのである。以上の地球の歴史、生命の進化発展については、京大の生命の科学的研究をもって世界的權威の東昇先生の書物によっている。先生は科学者であると共に熱心な念仏信者である。私は先生とご一緒に講演もいたし、先生のお書物から尊い教えをいただいている^④。

そこで、君の本当の年を報告しよう。先ずこの地球が出来てからと少く見積っても、四十六億年である、そこへお母さんのおなかの中に約十ヶ月いたただ

ろう。そして、この世に生を得て二十四才と言ったのだ。だから君の本当の年は四十六億年プラス十ヶ月、プラス二十四年、これが君の本当の年である。地球が出来てからこれだけの君の命の年齢だ、更に太陽系のかなたまで遡れば、まさに無限であり永遠である。だから、君の二十四年とは、便宜上区役所に登記された年で、この世に生をうけたものの命は、本当は永遠であるということである。今日の日本の教育は科学的な仮定の上に立って分析的な学問教育の上に立っている抽象的知識ですすめられている。だから、人間本来の真実生命の永遠性、従って尊厳性などを受けとることは出来ないのだ。

人の身を受くるは難くして

ところで、人間の命が四十六億年とか永遠の進化発展の上に生まれ出ているということまでは、今日の宇宙物理学や生科学などの学問的な理論での説明である。科学という学問の説明はここまでである。

これから先きが大事なのである。大切なことをこれから君に語って行こう。

それはこの四十六億年という長い長い間、時間的空間的に実に無量のあらゆる関係が全部整うてこそ、いま君がこの世に人間という生を受けているということだ。この永遠の長い間の全縁（全部の関係）が整わなければ出来ないことだ。どこかで一縁欠けるなら君のこの世に生まれ出ることは出来なかったのだ。例えば、君のご両親のお出合いがなければ、君は生まれ出なかったはずだ。君の父親、母親もまた夫々ご両親がお出合いなくば、君はどうしてこの世に生まれ出ることが出来ただろう。これを有機の進化発展から更に無機の進化まで遡りゆくとき、四十六億年間のあらゆる重々無尽の関係、即ち諸縁の結び目が、すべて君をこの世に生み出すための尊いお育てのはたらきをつづけて来たことである。この現実には実に否定すること出来ぬ厳然とした事実なのだ。今日、反抗期のふてぶてしい高校生が親に向かって、

たのもしないのになぜ俺を生んだとか、性欲の楽しみの果てに俺のようなもの生みおとしたのだと、自分の非行を相手にぶちつけている。未熟な若者の態度として一応は受けとめられるが、これに対して、いまの若者たちを説得するだけの確乎とした姿勢を親や教師が持たねばならぬことである。世の親とて、自分だけの力で子供を生むことなど出来るものではない。実に永遠の彼方から尊い無量の縁のお育てを通して出来ることであって、親はその中での一つの尊い縁の役割を果しているにすぎない。

しかも、ただ長い永遠の彼方からだと言うだけではない。生物進化のためには生命の支えとなるものが必要だ。太陽や水や風などの自然界からの恩恵は勿論だが、更に人間が今日文明の人類生活を営むことを得て来たかけには、動植物の無量の献身を受けて来たはずである。無量の生命の犠牲の上にこそ、只今の君の命は生まれ出ていることだ。言わば、君の命は無数の生命の献身の上に支えられた恩物なの

だ。だから、わが命、地球より重し、と言えるのである。君がこの世に生まれ出たかげには、この世に生まれ出ることの出来なかった無量の生命があったであろう。また、無量の縁の結び方のちがいで、人間として生まれ出ることが出来なくて犬や猫となつて行つたものもあるだろう。実に四十六億年の縁の無数の結び目の歴史というものは、私共にまことに厳肅きわまりない恐ろしさといふべきところをもつて迫りくるのである。世間で例えば東大を出たものをエリートなどと言うが、とんでもないことだ。今日の大衆社会の管理体制の中でコンピューターのような機械的人間となつて行く者が、どうして本当の生きた人間と言えるか。人間として生まれたそのことを本当に尊く受けとめることの出来た者こそ、エリート中のエリートなのである。

満月の夜、私は東の中天に月を仰ぎながら叡山の山道を登って行く。足もとからは長いかげがずっとうしろについている。私が二歩三歩と登れば、かげ

もついて来て登る。退けばかげも退く。しかし、人間の目は前についているから、自分のうしろに長いかげのついていないことを知らない。この小さい自分だけがからだを運んで歩いているのだと思つてゐる。まことに馬鹿者である。登って行く私のうしろには足もとから長い五十六億年のかげがしっかりとついてゐるのである。このかげがあつてこそ、いま生きて行く一歩一歩を登ることが出来るのである。だから、おかげさまと言うのである。

いま、君のからだの中でアミダさんが泣いていられるぞ。アミダ仏というのは法然上人や親鸞聖人の宗教で言う信仰の対象を言うのだ。アミダさんはどこかにぼつねんと存在せられるような方ではない。天地大自然の中にあつて、すべてのものの本当のめざめの力となつて日夜働き給うている真実の命なんだ。暗黒の中に落ちていくすべてのものの中にあつて、ひとときも早く、それらの本当の命の根源たる自分に早く気づいてくれることを祈りつづけていら

れるのだ。アミダというのはインドの梵語で、日本語で言えば、無量寿・無量光ということだ、永遠の光りを宿した永遠の寿は、即ち永遠のお育ての命ということである。この世に君の二十四才の生命を生み出し、育てて来ていられる永遠の彼方からのあたかいお育ての命をこそ言うのである。君のそのからだの中にいまアミダさんが、泣いて君のめざめを求められているのだ。私の語るところを通して、アミダさんの尊い祈りの声がきこえてはいないか。

今度、若し君が自分のからだを殺すならば、天地大自然の君の本当の親である永遠のお育て命たるアミダさんを殺すことになるのだ。これが最大の親不幸をすることになる。実に「人の身を受くるは、まことに難くして」と、仏法は教えている。エリートたる人間に生まれることは、まことに難が中にも難であって、実に有り得ぬことであつた。あり得ぬむつかしきことを難しと書く。人としてこの世に有ることは実に難きことであつた。だから「有り難し」

と受けとることである。科学的説明は上述の如く、今日の人間の生まれ出ている歴史を理論的に説明するのである。宗教的な受けとり方とは、だからそこに人間の生命を受けとつたことの尊さと、生きることの感動とよろこびを受けとつて行く態度である。そして、更にそこに命の根源たる無量の献身に対して、自分のなすべき使命というものを人それぞれに見出して、そこにわが人生に今日生きることの本当の意味を受けとつて行くことであつた。

私はこのように自殺への念慮に陥ちていた二十四才の青年に話していた。勿論、私の説得は始めてのことだし、それは理論としか先ず受けとられなかつたであろう。しかし、その後彼は自分ひとりでのところに来るようになり、やがて社会に出て結婚もいたしいまでは無事に活動している。ともかく、仏教の根本思想は宇宙人生を重々無尽の縁起的世界観から受けとり、一微塵の中にも無限無量の宇宙生命の尊い生命の息吹きを脈々として体感して行くこと

であり、この縁起の仏教的・世界観を浄土教では人生論的に、アミダ仏を私の命の根源である無量寿として受けとっていくことであった。いずれにするも、ここにこれまでの日常的次元でのせまい人生生活が破れて、真実の人生が展開される。新生とか復活とか言われるべき真人生であって、この宗教的生とは、その内容として、例えば充足、歓喜、報恩、そして永生と言われるべき高尚にし強じんな生涯としてあらわれてくる。それは「われ生くるにあらず、み仏われにありて生きたまう」という、百万力億万力より生まれた人生信仰の当然の結果であるだろう。

西欧と日本の人間形成の相異

ところが、この神或は仏の命を自分の主体として生きて行く人生態度において、ヨーロッパ人と日本人との間に大きな相違があることに注意しておきたい。

最近、ルーズ・ベネディクトの「菊と刀」に書か

れた「罪の文化」と「恥の文化」とをめぐって、欧米人と日本人との生きざまの相違が、文学者、精神医学者や思想家の間に賑かな論議を呼んでいる。^⑤即ち欧米人の文化、或はそこに見る生活の姿勢は、私と神との垂直の関係においてきびしい罪の意識を通して成立しているが、日本人の場合には「われと汝」という垂直の関係における神を見失っているため、ただ横の人間関係である仲間意識の中に、仲間の仁義を裏切った場合の恥の意識に支配されて生きているのだというのである。このベネディクトの評価に対しては賛否さまざまな批判が出ているが、大体において肯定せざるを得ないだろう。人が見えてなくとも自己の犯した罪に対しては垂直のわれと汝との関係における神のきびしい神審が予想される。

この世での人間の倫理的行動は、臨終の場合におけるざんげと来るべき新生とつながって行く。ところが、家族とか職場とか組合とか政党などといった横の仲間意識においては、仲間の仁義を破れる

とき、それは恥として認められるのだが、果たして、垂直の關係の場合の如ききびしい倫理的宗教的審判が投じられる場合はきわめて少い。人に見つからねばということにもなり、まあそこで責めることをやめるといふ人情論も当然生まれてくるだろう。早い話があのロッキード事件におけるアメリカと日本における証人台の上に立てる証人の証言にもその事情がよくあらわれている。良心の命ずるところに従って眞実を述べるとしらく宜誓しているが、いまの日本人に、あの種類の人間に一体良心などというものがあるのだろうか。

今日欧米にありても、キリスト教は世俗化の浪に洗われて、たしかに退潮して来ているのだが、何と言つても、生活の根柢にはいまも清水の如くにキリスト教の心が生活の中に長い歴史を通しておのずから生きている。人間は他の動植物と異り神の命たる分身を受けて生まれている。円の中心を神とすると、円周である無数の人間はすべて中心の神から命の半

徑によつて結ばれている。だから親子夫婦と言へども、円周である人間の生物学的次元での關係を一度去つて中心の神に還つて、そこから改めて親子夫婦兄弟となる。即ち神における親子であり夫婦である。そこに精神的な距離が神においておかれることによつて、親も子供も神からうけた一人の人格として対面することとなる。これが人間人格や生命の尊嚴を思想内容とする民主主義が、近世からヨーロッパの数百年を通して西欧において健全に養われて来た歴史的事実なのである。

ところが、日本の場合はこうした人間人格や生命の眞の意味での尊嚴など受けとられて来た何らの歴史的體驗を持つてはいない。權力の前には諸々として人間人格を売り渡して、個人人格の主体と自由のために闘つた歴史を持ち合わけではない。だから民主主義の思想的內容たる人間の尊嚴についても、生物学的次元の人間のとらえ方に終り、本能と欲望の満足のみならず得とししか受けとり得ない。それは円

の中心たる神を見失って、中心より人間の生きる主体性たる半径をもつてはおらず、円周上に個々ばらばらに並ぶ原子の如き存在だろ。この原子どもは肉親同士となると、生物学的次元において親子夫婦ねばりつくのだが、他人となると堅い殻の中にとじこもって、猜疑心をかためて人を信頼することを失っている。ヤスパースはうまい例を言う。このような原子的人間の生きざまはあたかも河をながれて行くいかだの如きものだと言う。いかだの一本一本の材木は今日はどこへ流されていくのやら、まことに不安である。とても淋しいのである。しかし、ふと気がつく、自分と同じ運命の材木が自分の左右にしばらくは流れているのである。それを見て少しく安心をする。しかし、どこへ流されていくのか、依然として、小さな安堵の中にも孤独の不安はまことに深い。

孤独は山の中にあるのではなくして、街頭にあると三木清は言っている。四条河原町の街頭には今日も大衆たる親子夫婦、アベックがたのしく買物の品

をかきいだいてたのしく混雑して歩いて行く。たしかにうれしいそうであり、連帯と信頼の様相をそこに見るようでもある。しかし、そうであるか、決してそうではないだろ。自己疎外をうけて物象化されたいまの大衆社会では、そのような本当の精神的な連帯とか一体感などあるものはない。にぎやかな親子づれや夫婦の今日の街頭の雑踏の中には、実一人ひとりの心の中には、孤独のさびしさがしみじみと流れているのである。アメリカのリースマンが「孤独なる群集」を書いて訴えているのは、現代人の原子化してしまった心の空しさをえぐり出しているところのものである。

そこで、日本の家庭における親子関係の場合、母親は自分の子供を扱う場合に、上述の如くに神に依ける、仏における親と子の関係として受けとることが出来ない。円周の原子共は中心の神なり仏に一度かえることをしない。他人ならば反ばつであり、身内ならば直ちに生物学的次元での愛情密着であり、

一体感である。子供は自分が生んだものであるということ、親の私有物ということが親の愛情という真綿につつまれて美化されてしまうのである。子供は賜りたるもの、神仏より賜りたる尊い人格であり、生命であるという受けとり方は、完全に見失われてしまっているのである。このような無宗教な家庭の母親が、また父親が、自殺を試みた息子の「なぜ生きねばならぬのか」という親への問いに対して、確信をもって死んではならぬと説得することが出来ようはずがないのである。「なんでそんな馬鹿なことを」と、精々悲しむだけであるだろう。親自身のわが人生に対処する正しい姿勢が出来ていないのだからいたし方ないことであつた。

自殺に対する

キリスト教と仏教の批判

ところで、ここで自殺に対するキリスト教と仏教の批判的態度を述べておきたい。一般的に言って、

自殺者の生まれる精神的風土を論ずる限り、キリスト教の欧米においては自殺は禁ぜられて来ているが、仏教は自殺を奨励するものではないが、歴史的社会的に見ると、結果的にはこれを合理化して肯定して来ているとも言えるだろう。即ち人生の現実の苦難に堪えるのではなくて、浄土への逃避行としてすめられたというのである。^⑥

たしかにキリスト教においては、中世から近世にかけて、特に自殺はきびしく否定せられて来た。人間だけが神の命をうけてこの世に送られて来たのである。罪の悔い改めによりて、神の恩寵を受くれば、この世のいかなる苦難にも堪えて生きうる可能性を持ちうるのである。ところが、自殺とはこの神が人間の人生に新して意味を与え給う可能性を人間の手によりて断ち切ることである。このことは神に対するおそるべき罪である。神は人生の戦いにおいて人間の行動を倫理的立場からきびしく見守っていられる。そして、人間の生の終りの臨終が、その人間に

とりてはきわめて大切な意味を持つてくる。それは終末時における来たるべき神の審判の前に立たされる運命にあり、そのとき「われはその顔を知らず」との神の宣告を受けたら、それこそ地獄ゆきなのである。だから、ダンテの「神曲」にありては、この世での自殺者、または自殺未遂者はすべて地獄の第七界の谷の第二環に断罪されている。これに対して、日本における自殺者、特に母子、相愛者の心中の場合、欧米の天国と同視されている極楽浄土に南無阿弥陀仏を通して直ちに入ることが、心情的に受けとられて来た。私たちは心中ものの劇芝居において、このような場面を見るのが常識となっていた。西欧の神話では自殺したものは、さかさまに地獄の世界におちて行くのであるが、日本の通俗信仰からは自殺者もそのまま現世の地つづきの極楽浄土に入ることが約束されているということであった。

この事実はいかに歴史的な社会現象としては事実であらう。すでに平安朝中期から末期にかけ

て社会秩序の乱れと不安から捨身往生が行われて来ている。捨身とは自殺ということ、この苦難の現世を去って浄土に逃避往生せんとする宗教的自殺であった。焼身往生、入水往生、絞首往生、断食往生、自害往生などがある。当時の各種往生伝ではこのようなさまざまな自殺の様相が記述されている。下って元禄期の情死流行の場合、そして、現代においてもこの苦しみの現世を去って浄土に信愛の生を約束するという通俗的な浄土信仰はづつと系譜をつづけて来ると言える。この長い日本人の浄土教的精神風土を眺めてみると、浄土教の通俗信仰が自殺を特別に推奨したという事実はなかったとしても、キリスト教特にカトリックの場合の如くに自殺の防止に役立ったこともなかった。むしろ死後の世界を情緒的に美化して約束することによって、結果的には自殺の多くなった時代のあることも事実であったらう。

しかし、ここに一言添えておきたいことは、この

ように結果的に自殺を合理化したり、肯定することの結果というものは、法然上人や親鸞聖人の純正浄土教信仰とは、根本的に異なる俗流信仰であるということである。若し、これを日本浄土教の歴史の中に求むれば、法然浄土教の生まれてくる源流たる恵心の「往生要集」の浄土教が上下を風靡することとなつて、熱烈な浄土願生者を生むこととなつた平安浄土教の通俗的信仰からであつただろう。もし法然や親鸞の信仰の中にかかる自殺への傾斜信仰の因由を求めるとするならば、それこそ法然親鸞の信仰を曲解するもので、法然以前の平安朝を風靡した浄土教の中にこそ求めらるべきものであるだろう。平安朝の浄土教においては極楽浄土とは官能的な現世との地つづきの極楽であり、この世と同一次元の連続上に求められた欲望の対象化されたものであつた。ところが、末法の乱世という煉獄を通して生まれた法然親鸞の浄土とは、現世の欲望的自我が完全に崩れたとき、彼方よりあらわれ来た真実の浄土であつ

て、それはこの現世とは非連続の現世を超えた高次元の世界であつた。現世の延長線上に、しかも人間の欲望本能を投影した対象化されたものではなかつた。だから、この地上を否定してかきこに飛び去るのではなくて、濁世であるこの現世の絶対否定を通じて、今度は再びこの地上に絶対の世界である浄土よりの反照の光りを受けて、そこに全く新しい生の回復をこの地上に全うして行くものである。だから、そこに新生復活による生きることの尊さと意義とを新しくうけていくこととなる。これが法然親鸞の浄土教のところであり、乱世の宗教者として時代を乗り越えて来た浄土教の心である。これはまた釈尊仏教の根本精神である縁起の壮大な世界観人生観の浄土教的な理解であつた。だから、ただいまの自堕落な生きざまをそのまま肯定して、いわゆる死後に極楽たる浄土を求めることなどは真正浄土教の道を大きく逸脱せるものである。只今の一瞬一刻が念仏のうちに真実に生かされて生きゆくとき、やがてこの

肉体がほろぶとも、わが足あとがそのまま永遠の大きな命の世界たる浄土にめでたく迎えとられて行くのである。現世の官能的欲望的自己をそのままにして彼土に浄土往生を求むるなどは、曇鸞法師もきびしく戒めている如くに、人間のあさましき欲望そのままの観念的な投影にすぎぬ。

このような死後の世界の受けとりが、今日の青少年の自殺の場合にも系譜を残して来ている。特にいまの若い人々には死ということの現実のきびしい事相を知らない。マスコミの上で死というものがただ観念的抽象的な映像の上で考えられているから、死後の浄土というものが自然と憧憬的なもの逃避的なところとして安慰に感受されているのである。青少年が現実の困難にたえきれなくて彼らなりに安慰に考えた天国とか浄土というものに逃避していく事実と逢着する度に、今日のマスコミの無責任を憎むと共に、浄土教者としての責任を痛感しているのである。

宗教的世界観なしに 人間教育が出来るか

以上の論述から日本が世界で有名な子供天国、墮胎天国、そして無宗教者の天国であることの様相が理解されよう。そして、何のための豊かさかと問わざるを得ない現代社会において、いま生きること、学ぶことの空しさから青少年の非行や自殺の増加という事実は、根本的には明治百年今日に至るまで人間不在の教育の結果であると言える。

教育というものは人間にわが人生をどう生きていくかという主体的な実践原理を与へる世界観・人生観を教へて行かねばならぬものである。世界観・人生観をもたぬ人間がいかに哀れな、また危険な人間であるかは、戦後の合言葉となっているいわゆる民主教育の実情がこのことをよく示している。高校や大学がそうした世界観・人生観を学問的思想的に与えて行かねばならぬに拘らず、これをなし得ず断片的な知

識の伝達のみであたかも風の前の木の葉のように物象化された原子的人間を造って、産学共同の要求にのみ答えて来ている。だから、人生社会ととりくんで、いかに生きるかを問う少しく気概のある若者たちは、代々木の私設文部省日共の指導に走って行くのである。しかし、今日外面は物富み仕合わせに見えて実は不幸な若者たちに、生きることの感動と意義とを与えていくものは、人間存在の根源的命たる宗教的な生命にふれることによりて始めて全うせられるものであり、また虚構の繁栄社会の底辺を大きく蔽うている生きることのむなしさというニヒリズムも、それによつて克服されるものと思つてゐる。

そこで、最後に現代日本の教育と宗教という大きな問題について述べて本稿の結論としたい。

私は昨年愛知県の仏教関係の大学や愛知教育大学の代表の各先生の連名で、海部文部大臣に愛知教育大学大学院設置にあたり、大学院講座の中に仏教哲学の一講座を設けることを要請した。たまたま海部

文相が、私の東海高校長時代の第一回卒業生であり、よく人の意見をきかれることを知って、各教授連名の署名と私からの詳しい親書をもって、前田恵学先生が文相に再三面談せられた。それから前田先生と私が愛知教育大学に井上学長を訪れて私共の意のあるところを二時間にわたって述べた。愛知県は全国でも有数の仏教信仰の篤い土地であり、愛知教育大の如き教育道場にありては、将来教壇に立たれる教師が人間人格を形成する上において仏教の哲学や思想がいかに大切であるかを知ることが絶対に必要であるということ述べて、大学院講座の構成内容、他の講座とのふりあてなどの関係も詳しくご参考に申上げて仏教哲学の一講座の設置を強く要請した。それから實際上の推進力たるK総務部長に面接、同様の問題について二人から詳しく申上げたのである。

ところが、コンピューター研究所長を兼ねているK氏は、憲法第二十条第三項の「国及びその機関は、

宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」という条文をもち出して、教育大学では出来ないというのである。大学は科学学問の場であって、宗教を教えるところではないということで、この憲法の条項をくり返しくり返し主張されるだけであつた。憲法の条文で国公立の教育にとり入れてはならぬと言われている宗教教育とは、教育基本法では宗派宗教と明確に規定されているのである。ある特定の宗派宗教となれば、その宗派の信仰ということになり、それはおのずから特定宗派の狂信的信仰の布教宣伝となるのであって、それらはせっかくの憲法に保障された「宗教の自由」を侵害することとなる。そうではなくて、宗教情操とか宗教についての哲学思想とか知識を教えることは全く差しつかえない。だから、公教育にありても人格の完成や社会生活にとって大切であるからこれが育成に十分注意するように、教育基本法には打ち出されてある。このことが総務局長には理解が出来ていないのである。

早い話が生きた人間を理解するのに、科学、社会学や学問だけでの知識で本当に出来るか。教育学、心理学等、今日の人間を理解しようとする教育的方面の学問は、すべて科学的な方法論の上に立っている。科学的な方法論は分析的であり知的対象的な研究方法である。もともと自然界を対象として、これを分析実験してそこに一般的な法則的なものを組み立てて行くものであつた。それが人間の集団生活である社会科学の対象の方面にも展開されて来たし、更に人間個人の心理的な内部的な方面にも分析探求の方法を向けて来たのである。しかし、科学的な対象的な把握の理解であるかぎり、そこに理解された人間は生きた血のかよった具体的な人間の行動、或はこの世界とは言い得ないだろう。そのような分析の対象的な知識学問の何ほどの伝達をうけた大学卒業生の教師というものが、どれだけいまの悩める若者たちの孤独と不安の人間心理の理解に投じて行けるものだろうか。それ恐ろしいことである。

よく平気で教壇に立ちうるものだと思う。

総務局長の部屋を出て廊下で顔を見合せたとなん、前田恵学先生は私に向かって、世はまさに末世ですね、と深いため息であった。

宗教的世界観とか人生観というものは、人間形成上における中核となるものである。教師の描く教育理念の中核には、この宗教的な世界観がおかれるべきであるだろう。今日、一応学校や家庭において言われている日常的な生活のしつけとか、よき社会的な適応とか、豊かな教養と言ったようなものだけでは、人生の苦難に堪えていく確乎たる人間は形成されない。まして、今日の如き繁栄社会にあっては、知らずしらずのうちに虚構の平和のぬるま湯の中に埋没して生ける屍ともなりがちである。生きることの究極の目標は、性格の中核として高貴にして強じんな信念、世界観が打ちこまるべきである。宗教的な世界観を抜きにしては、教育は国籍不明の平均化された気の抜けた土人形をつくるだけである。

宗教的阿呆の日本誕生の歴史

明治百年、今日にいたる日本教育における宗教政策が、完全に失敗であったことについてごく簡単にふりかえっておきたい。^⑧

明治五年に政府が画期的な学制を頒布してわが国の学校教育制度の基本を確立したが、それは当時の後進国の日本が国際的展望においてアジアの各地同様な植民地に陥ちぬために、文明開化と富国強兵の基本的な方針によるものであった。そのために国家が国民の教育権を握って公教育を推進して、初代の森有礼文相の時代（明治二十年前後）にはすでに国家主義的な教育体制を確立して、明治二十三年には教育勅語が發布されて戦前の日本教育の根本は確立された。そこで、それ以後、日本の国家主義的な教育体制の歴史的経過における公教育制度と私学との関係に深く留意することが、今日の私どもにとりて重要なことである。

もと明治の私学にあつては、私塾や法律学校から発展した慶応、早稲田等があるが、その他に明治六年のキリスト教の解禁によりて欧米のキリスト教団体の支援で日本各地に宣教師を中心としてミッション・スクールが設立されて来たし、その刺戟を受けて仏教各宗関係の学校も設立されて来た。ところが、政府当局はこれら私学の中でいろいろと日本国体との関係から議論を生じていたキリスト教系の学校に対して、これを抑制することを期待したが、単にキリスト教のみを抑圧することが出来ない。すでに神道はいわゆる宗教の埒外からはずして、日本人たるものの倫理道德の規範として設定したので、ここに私学一般に抑圧を加えることによつてキリスト教系の教育を抑えることとなった。もともと文部官僚の思想からすれば、日本国民の教育権は国家が掌握して国民の教育は当局が経営するものとの常識をもつていたのであるから、私学などというものは助成など当然うべきではなく、官公立校の代用品位にし

か考えていない。代用としての意味を逸脱するならば、いつでもこれを破却することも出来ると考えられていたのである。だから、私学は明治三十二年の私立学校令（小学校令、中学令、高等女学令）の制約を受けて、政府当局の嚴重な監督支配下におかれた。そして、この私立学校令の公布と同時に、文部省は有名な訓令第十二号を明治三十二年八月に出したのだが、これが日本の宗教教育について今日にいたるまで、日本人の宗教に対する誤れる考え方を大きく養成することとなつた歴史的意義をもつものとなつたのである。訓令の全文はこうである。

「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外に特立セシムルハ学政上最必要トス、依テ官公立学校及ビ学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課外タリトモ宗教上ノ教育又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルベシ」

この訓令は国公立はもとより私立学校においても学科課程が法令で規定されている小学、中学、高等

女学校にありては、課外であっても宗教教育や礼拝儀式を行うことを禁止するものであって、この訓令は宗教関係学校の存立を法的には實際上否定することを規定しているものである。そこで、先ずキリスト教系学校がこの法規に対して起ちあがり、いろいろの非難物議が生じて行つたが、その後私学の現場の処理に対しては文部当局も多少緩和の態度をとつては行つたが、この訓令が単に教育者のみならず、日本人全体に与えた影響というものは、今日に至るまで実に甚大なるものがあつた。日本の官公立学校において、それ以来今日まで小学校から大学まで宗教に何ら全く関係のない教育が明治、大正、昭和を通じて行われて、これが教育の正統の如くに考えられて来ていることである。更に国の官公立学校から除外された宗教というものに、日本人全体が全く無関心となつて行つたということであつた。徳川三百年、或は明治維新を通して、日本人は権力の前に自己を埋没するように飼育されて来た。その間、民権

運動も少しく抬頭するが、それもやがて明治の国家主義的権力の圧力の下に屈服していく。そうした国家権力の前に卑屈になつた日本人は、教育面においても無条件に国公立を私学より高きものと受けとつた。その国公立の教育に必要な宗教は、日本人として人間としての自分たちにも不必要なものであるとの受けとり方となつた。この点においてこの明治三十二年の文部官僚の出した訓令は実に大きな失敗であつて、私が先きに明治百年日本の宗教政策は完全に失敗であるということを述べて来たのである。そのことはこの訓令そのものを誤りと言うのではない。アメリカ、フランス等の先進国にありても公教育と宗教との分離が当然に行われている。しかし、そこでは日曜日の教会での一族そろつての礼拝や、家庭の中にはキリスト教を根底とした生活信条が生きている。まして、英国や西ドイツでは公立の小学校では、学校での礼拝や宗教の時間が週案として実行されているのである。だから西欧各国では、

たとえ公教育と宗教の分離が行われても、社会や家庭を通して宗教信仰を通じて生活が導かれているというものである。

学校教育における信教の自由は守らるべきであるだろう。しかし、日本の文部官僚はそれと同時に、宗教の信仰が、社会生活や人間個人の人間形成上にどんなに大切なものであるかということを、日本国民に明確に揭示すべきであつたのだ。ただキリスト教排斥を意図したために、また国家主義的な立場から教育権を行使した文部官僚であつてみれば、人間の本来に生きることの根源的な命などという深い自覚など、到底自らが持ち得ず、従つて、国民生活に対して心してその面の必要性など揭示出来るものではなかつたのである。

このような事情の中で、更に大正から昭和の初めにかけてソ連からマルクス・レーニン主義の思想運動が滔々として流れ、日本青年をして社会主義一色でもって蔽うて行くこととなるが、このマルクス主

義は単なる思想ではなくて、いかに生き、いかに実践していくかという革命的な唯物弁証法という世界観の上に立つものであつて、この思想と実践とが日本人の宗教否定なり宗教への無関心をいよいよ大きく深めて行つた。このような社会状況に対して困惑した政府当局は、漸く昭和十年に文部次官通牒の形成で「学校ニオケル宗教的情操ノ涵養ニ関スル件」を出しているが、これはそれまでの当局の宗教政策の失敗を糊塗したものにすぎぬ。曰く「明治三十二年文部省訓令第十二号ハ当該学校ニ於テ特定ノ教派宗派教会等ノ教義ヲ教ヘ又ハ儀式ヲ行フヲ禁止スルノ趣旨ニ有之宗教的情操ヲ涵養シ以テ人格ノ陶冶ニ資スルハ固ヨリ之ヲ妨グルモノニアラズ……今般此等学校ニ於ケル宗教情操ノ涵養ニ関シ留意スベキ要項ヲ左ノ通定メタリ依テ学校当事者ニ対シ篤ト其ノ趣旨ヲ示達シ以テ遺憾無キヲ期セラレ度」として、宗派的教育は家庭なり宗教団体の活動によるものとして、学校教育は一切の教派宗派教会等に対して中

立の態度をとること、家庭及び社会において養成せられた宗教心を損うことなく、生徒の内心より発現する宗教的欲求に留意し、苟くもこれを軽視したり、侮蔑するようなことのなきこと、人格の陶冶に資するため学校教育を通じて宗教的情操の涵養をはかることは極めて必要であることを指示している。そして、宗教情操の涵養にあたりて学校教育上注意すべき事項として、修身、公民科の教授においては一層宗教的方面に留意し、哲学の教授においては一層宗教に関する理解を深め、宗教的情操の涵養に意を用うべきこと、国史では宗教の国民文化に及ぼした影響、偉人の受けた宗教的感化、偉大な宗教家の伝記等に留意すること等々がこゝ細まゝく揭示されている。

しかし、これもいま更何かと思わせられる。人間個人の魂の問題を扱う宗教の問題について、明治大正を通して無宗教の日本社会の精神的風土をつくりあげておいて、いま更に一片の文部官僚の通達によりて人間の魂の動きが操作されうるものでもあるま

い。

やがて、戦後を迎えて、昭和二十年八月に文部省訓令第八号の「私立学校ニ於テ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ得ルノ件」が出て、問題の明治三十二年の訓令第十二号は改訂されることとなり、私立学校における宗教教育が公然と認められることとなった。この訓令が現在の私学における宗教教育を規定しているものであって、「私立学校ニ於テハ自今明治三十二年文部省訓令第十二号ニ拘ラズ法令ニ定メラレタル課程ノ外ニ於テ左記条項ニ依リ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ得」となして、生徒の信教の自由を妨害せざる方法によって、特定の宗派教派等の教育を施し、また儀式を行う旨を学則に明示するよう求めている。

そして、日本国憲法に基き人格の完成を第一条に掲げた教育基本法第九条には、宗教教育についても新しく規定されたのである。即ち第九条第一項には「宗教に関する寛容の態度、及び宗教の社会生活に

おける地位は、教育上これを尊重しなければならない」とし、第二項には従来の「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他の宗教的活動をしてはならない」ことを挙げている。

このように国公立の学校においては、宗教の自由を保障するために特定の宗教のための宗派的宗教教育を禁じているものであって、宗教情操一般とか、宗教についての思想とか学問的研究を禁じているものでは決してないのである。絶対者の前に立って謙虚なる自己を見出していくこと、宇宙の壮大なる莊嚴に心打たれていく、或は万物一体感より生まれる共同愛と言った宗教感情は、人間たるものがその生命の根源よりおのづから受くべきものであって、平安なよろこびの人間生活のためには欠くことの出来ぬ尊いものである。こうした尊い宗教的情操とか哲学思想を学問的に学ぶことは、決して国公立学校においても禁ぜられてはいないのである。ただ宗派的

教派的宗教となると、いわゆる独善的信仰となつて排他的宗派的な布教宣伝となることをおそれ、宗教の自由が犯されることとなるのである。ところが、その後、公立学校の現場にありては相変らず宗教について不分明な混乱を生じたので、昭和二十四年十月文部省は次官通牒を出して、「社会科その他、初等および中等教育における宗教の取扱について」公立学校の現場における具体的な注意を与えて、留意すべき点をことまかく挙げてゐる。

以上の如き歴史的事情を経て今日に至っている。だから国公立における教育が宗教に対する理解のきわめて不十分なることは言うまでもないことで、無宗教無信仰をもって日本の知識人や進歩主義者の性格とし、またそれを自負している如きありさまである。それならば、私学教育において人間人格の根底を培養する大切な宗教教育が、現在十分に行われているかと言えば、これまたさまざまな事情によって、必ずしも十分とは言えない実情にあるだろう。^⑨

ニヒリズムの克服と私学教育

私は今日の日本教育の役割は、虚構の上に生まれた物的繁栄のかけに宿る生きることの空しさ、即ちニヒリズムを克服することにあると思う。そして、科学技術の華かさの下にかくされたこの生きることへの空しさを克服しうるものこそ宗教的世界観人生観であった。しかも、このような大切な教育的使命が課せられておるものが私学の教育であった。生きることの空しさ、学校生活の無意味を克服しうるような教育は、公立教育においては中々実現出来にくい歴史的事情にあるだろう。ニヒリズムを克服する宗教的世界観人生観の上に建学精神をもつ私学教育こそがこれを果しうるのである。^⑩

私はここで問おう。一体、児童の福祉とは何か、青少年のための福祉とは何を意味するかと。福祉とは特定の限られた人々に対して、またこれの仕事に従事する限られた専門職の者を言うのではないだろ

う。それにまた福祉とは、単に物とか施設や制度だけの問題ではあるまい。すでに福祉を単に物的な施設や制度と言った次元において約束した場合の憂うべき人間喪失の現実が、スエーデンやデンマークの青少年や老人の非行や自殺に現われて、さまざまな矛盾や悲劇を生んでいる。

これら世界の模範となった北欧各国では、国民の負担すべき税金もその限界に達していることもさることながら、もともとボランティア精神をその支柱とすべき福祉制度が、国家的な官僚組織に展開して人間を抑圧する制度に化していつているし、恐るべきことは青少年の生活態度に無気力、無責任、自堕落からして、さまざまな恐るべき非行、そして自殺の増出となつて現われていることである。^⑪

もともと人間はただ物質的な生活だけでは、意味ある人生生活を全うし得ない存在である。福祉とは人間の全存在を統一にとらえて、全人生を全うしうるように配慮することではなくてはならぬ。言うな

らば、人間は生ず生物学的次元の存在として食欲性慾等の自然的欲望が健全に保持さるべきであるだろう。次に社会的文化的な次元における人間として、さまざまな文化的な施設や制度が考慮され実現されて行くことになるだろう。そして、最後に人間は自分が真に人間として意義ある人生を味い行くためには、自己の生きる命の根源たる天地自然のたいなる命にめざめることであつた。これこそ真実の宗教的生命に自覚することであつた。人間はこれら三つの次元を全人格のうちに矛盾することなく統一し、生かし得て行くものであつて、そこに全人として今日に生きる意義ある生活を全うして行くことが出来るのであつて、ここに真に福祉の意義も実現されて行くのである。この第三の宗教的立場からの人間存在の実存的意義が忘れられているのが、今日の福祉の現実のすがたではないか。またそうであるとすれば、青少年の福祉は本当のものではなくて若者たちの非行や自殺をとどめることは出来ないであらう。

現代日本の教育は、この人間の生きる根源的な命の世界へのめざめを教えることを見失っている。そこから青少年の恐るべき非行、そして自殺の増加が出て来ているのである。学校における教師たちは、家庭における親たちは、この事実をじつくりと見つめることである。自殺へと走る息子や娘たちは、いまでも「なぜ生きねばならぬのか」と訴えつづけているのである。これに対して、世の親は、また教師はわが子、わが学生生徒に向かつて、生きて行くことを自信をもつて納得させることが出来るのであらうか。人生はいかに苦しくとも、絶対に生きる価値のあるものだと言得ることが出来るのだろうか。それには、先ず親自身が、また教師自身が、人間の生きる根源を問うところの宗教的な世界観、人生観に生きることであつた。自らの生活の生きる姿勢を正すことであつた。

京大にあって、戦後三十年にわたって死にいやが若い学生たちと取りくんで来られたカウンセラーの

石井完一郎氏は、近著の「青年の生と死との間」の中で、一人の苦悩の末倒れた若者について、こう書いている。

「神主は死は不吉だとお扱いをして通り、僧侶はまだ死んではないから自分の仕事ではないとして通り、神父と牧師は神学論争に忙しくて見過ごし、学者や教師は未だ沢山ではないからと考えて通り、医師はどの位危険か検査してからと言って通り、カウンセラーは、助けてくれといていないからと、通り過ぎているというところがないかどうか」

そして、石井氏は更に「死んで行った一人ひとり私のそばによりそって生きいきと語りかけ、反撥し、笑い、涙を流し、もだえ苦しんで、私のこのペンを動かしてくれたが。そして、同時に次第に明らかになる『生きがい』収奪への今日の社会や教育等の手のこんだ『からくり』に対して、心底の怒りを禁じ得なかった」と書いている。この石井氏の訴え

は、若くして死んで行った者への鎮魂の言葉として、私ども宗教者や教育者の胸をきつく衝くものである。

(註)

- ① 現代エスブリ「青年」―不安と病理の中の「高校生
の自殺」参照
- ② 大原健士郎「自殺論」(青年における生と死の論理)
第七章「自殺―その要因の追究」参照
- ③ 同著四五頁。藍沢鎮雄「日本文化と精神構造」一八〇
頁
- ④ 東 昇「人間が人間になるために」同「生命の深奥
を考える」参照
- ⑤ 木村 敏「人と人との間」牛島義友「西欧と日本の
人間形成」同「家庭教育と人間形成」ベネディクト
「菊と刀」参照
- ⑥ スチュワート・ピッケン(堀たず子訳)「日本人の
自殺」二二二頁以下
- ⑦ 自殺者は地獄の憂愁の森の中で、恐ろしい茨の木と
されている。ダンテが手をのべて茨の小枝をむしりと
ると、「なぜ私を折るのだ、君には憐憫の心がないの
か」と茨の幹は気味悪く叫ぶ。そして、その折り口か
らは黒い血がどろどろと流れ出る。
- ⑧ 「三途にかえるべきことをする身をだにも、捨てが

たければ、かえりみはぐくむぞかし。まして往生すべき念仏申さん身をば、いかにもいかに、はぐくもてなすべきなり。かりそめにも、いるかせにすべからず。よくよくいたわるべきなり。念仏の助業ならずして、今生のために身を貪求するは、三惡道の業となる。往生極楽のために、自身を貪求するは、往生の助業となるなり、とぞ仰せられける」とは、法然上人が禪勝房に与えられた有名な教誡である。真人生を生きていくからだがいかに大切であることを示されている。親鸞聖人も、信心受けた念仏者のよろこびの人生を現生十益として味っていられる。それをまとめると、充足、歡喜、報恩、永生の人生となる。いかなる苦難をもこえて、力いっぱい生きる意義とよろこびとを感得するのが、真正浄土教の生きる姿勢である。

⑨ 西元宗助「宗教と教育のあいだ」林靈法「法然浄土教と現代の諸問題」中の「教育と宗教」参照

⑩ 西元宗助「宗教と教育のあいだ」参照

⑪ 松本 昭「ニヒリズムと教育」（青年の実存的欲求不満の問題）参照

⑫ 福祉社会の思想・入門講座第一巻「福祉の原点」、秋山康男「白い北歐」

⑬ 石井完一郎「青年の生と死との間」二八一頁

（昭和五四年九月）